来年度よりFLY Programを開始

—学生の長期自主活動が大学を変える！

来年度の学部入学生を対象に「初年次長期自主活動プログラム（FLY Program: Freshers' Leave Year Program）」という新しいプログラムが導入されます。このプログラムは、東京大学が現在進めている総合的な教育改革の新たな試みの一つです。プログラム導入の背景にある問題意識やプログラムが目指すものについて、教育担当の佐藤愼一理事・副学長にお話を伺いました。

理事・副学長

佐藤 愼一

総合的な教育改革

FLY Programの実施は、濱田総長が目指す「総合的な教育改革」と密接に関係します。そこで、まず「総合的な教育改革」について説明します。

昨年4月に設置された「入学時期の在り方に関する懇談会」（座長・清水孝雄理事）は、1年にわたる検討ののち、本年3月末に秋入学の導入を是とする最終報告書を濱田総長に提出しました。この報告書を受けて濱田総長が全学に向けて発表したのが、「改めて、総合的な教育改革の推進に向けて－学部教育について－」（4月10日）と題するメッセージです。

このメッセージで濱田総長は、「世界的な視野をもった市民的エリート」（東京大学憲章）の育成こそが東京大学の教育的使命であるとしたうえで、日本社会の将来に対する危機感の高まりとグローバル化の急速な進行の中で、学生を「よりグローバルに、よりタフに」育てるためには、単に学事暦の変更にとどまらず、広範な領域で教育改革を迅速に進めることが不可欠であると主張しています。そして、求められる教育改革の内容を、「教育制度の大枠に関する事項」と「教育の質向上に関する事項」に大別したうえで、前者の例として「入学試験制度など高大接続の改善」や「進学振分け制度の改革」など6項目、後者の例として「教養教育の高度化、教養教育の後期課程・大学院への展開」や「国内外での体験活動等幅広い学習プログラムの整備」など6項目をあげています。合計12の項目は、いずれも東京大学の教育の根幹に関わるもので、まさしく「総合的な教育改革」に他なりません。

この「総合的な教育改革」を推進するため、本年5月、役員会のもとに「入学時期等の教育基本問題に関する検討会議」（座長・清水理事）が設置されました。同会議の下には複数の部会が置かれ、総長補佐経験者を中心とするメンバーが、「総合的な教育改革」に関わる様々な問題を熱心に検討しています。

これまで東京大学では、それぞれの部局の責任において、部局という枠内で教育改革が行われてきました。多くの部局は熱心に教育改革に取り組んでいますが、改革が個々ばらばらに行われてきたという印象は拭えません。それに対して今回の「総合的な教育改革」は、多方面にわたる改革を同時並行的に全学規模で行おうとするもので、もしかしたら戦後の新制大学発足時以来の規模の改革になるかもしれません。

FLY Program

FLY Programは、東京大学に入学した直後の学部学生が、自ら申請して1年間の特別休学期間を取得したうえで、自らの選択に基づき、東京大学以外の場において、ボランティア活動や就業体験活動、国際交流活動など、長期間にわたる社会体験活動を行い、そのことを通じて自らを成長させる、自己教育のプログラムです。私たちは、FLY Programに参加する学生が、受験時代に染みついた意識や価値観をリセットし、大学での学びの意義や目的を自ら確認・発見してくれることを期待しています。

イギリスやアメリカの大学には、入学猶予制度が存在し、広く利用されています。大学に合格した学生が、1年間入学を猶予してもらい、その間に様々な社会体験を積む中で、大学で学ぶことの意義や目的をじっくりと考え、たっぷりと充電した状態で大学の門をくぐるという制度です。イギリスでは、10%を超える学生がこの制度を利用していると言われています。

東京大学のFLY Programは、この入学猶予制

「総合的な教育改革」
これまでの改革の状況は、東大HP「総長談論」で発信中。
http://www.u-tokyo.ac.jp/president/index.html

リセットして武者修行
「体験活動」も「FLY Program」も、学生を社会に送り出して『武者修行』させるという共通の目的がある。違いは、「FLY Program」に『リセット』の意味合いが加わっていること。

度を手本にしたものですが、プログラムに参加する学生に対して必要な情報や助言を提供するためには、いったん入学したうえで休学する仕組みの方が効果的であると、私たちは判断しました。プログラムに参加する新入生には、教員のほか、先輩に当たる学生もアドバイザーとして付けるつもりです。プログラムに参加する学生が海外に活動の場を求めたとしても、電子メールを使って適切な助言や情報を提供することは可能です。

ギャップ・イヤー
イギリス発祥の制度で、大学入学資格を得た若者に、入学を遅らせて社会的な見聞を広めるための猶予期間を与えるもの。この時期にアルバイトなどをして今後の勉学のための資金を貯める人も多いという。

濱田総長の思い

濱田総長は昨秋「秋入学は生き残りへの賭け」と題する文章を雑誌『文藝春秋』に寄稿し、その中で大学合格から入学までの間にギャップイヤーを設けることの意義について、次のように述べています。

> ギャップイヤーを通して知識の習得だけではない、別の世界が存在することを知ってもらいたいのです。厳しい受験勉強の時期から解放されて、自分たちが生きてきた世界とは違った価値や原理で動く社会を身をもって体験し、そのうえで何のために大学で学ぶかについて考える時間が学生には必要です（『文藝春秋』2011年11月号）。

FLY Programを生み出したのは、濱田総長のこの強い思いです。

日本社会は、履歴に空白期間のないことが尊重される社会です。若者たちの人生も、3月に高校を卒業して4月に大学に入学し、3月に大学を卒業して4月に企業に入社するという具合に、異なる人生の段階が切れ目なしに連続します。この無駄のない連続性は、もしかしたら、人生の次のステージに移行するために本来は必要な「考える時間」を、日本の若者から奪っているのかもしれません。そしてそのことが、日本の若者に見られる主体性の乏しさの一因なのかもしれません。

受験勉強と大学での勉強
問題が与えられ、正解のあることが前提の受験勉強と大学での学びは全く異なる。ひたすら受験勉強のみで突っ走ってきた受験生には大学での学びの前にリセットすることが必要だ。

FLY Programは、濱田総長がシームレス社会に風穴を開けようとする試みであると、私は理解しています。この風穴を利用して人生の寄り道をし、様々な社会体験を積み、自らの過去と現在と未来を見つめ直して、「よりグローバルで、よりタフに」成長する若者がひとりでも多く現れることを願っています。

今こそ改革
1991年の大学設置基準の大綱化、大学院重点化といった施策は、「大学」を拡大した。しかし現在、国内を見れば18歳人口は200万人から120万人に減少し、海外ではトップ大学の熾烈なグローバル競争が始まっている。東大の改革は30年後、50年後を見据えて取り組む。

その予測と展望

FLY Programに参加を希望する学生は、来年3月、入学手続き書類を送付する際に事前申請を行い、4月4日に行われる詳しい説明を聞いたのち、本申請をすることになります。本申請の際に詳しい活動内容を記した申請書を提出してもらいますが、安全管理上問題のある計画や公序良俗に反する計画でない限り、申請を認める方針です。入学直後の大切な1年に自らの判断で敢えて休学してFLY Programに参加しようというわけですから、それなりに考え抜かれた計画が提出されるはずで、仮に私たちの目から見て突飛な計画であっても、学生の意思と意欲を尊重したいと思っています。FLY Programに定員はありませんが、諸般の事情から、応募者が30名を超えた場合には選考を行います。この場合、①長期性や継続性のある計画、②社会性や国際性のある計画、③公共性や規範性のある計画が、優先されることになります。

FLY Programに参加するのは一生に一度の機会ですから、せっかく素晴らしい計画を持ちながら、経済的理由でプログラムに参加できない学生が出ないようにしたいと考えています。そのような学生に対しては、本人の意欲や計画内容を審査したうえで、必要な活動経費の一部を支援します。

来年3月に何人程度の学生がFLY Program参加の事前申請をするかについては、関係者の間でも意見が分かれています。30人を超えると予測する人もいれば、ゼロと予測する人もいます。そもそもFLY Programは日本でも前例のない試みであり、かつプログラムへの参加を学生が本気で考え始めるのは3月10日の合格発表のあとですから、私自身は、初年度の応募者は多くはないと予想しています。FLY Programに参加した学生には、1年後に報告書を提出してもらいます。その報告書はウェブで公表するつもりですが、公表された報告書を読み、「東京大学に合格してFLY Programに参加すれば、こんな素晴らしい体験ができるのだ」ということを知った高校生や中学生が増えるにつれ、応募者は次第に増加すると期待しています。長い目でFLY Programを育てていきたいと思っています。【談】

FLY Programとは?

平成25年度から新たに、FLY Program (Freshers' Leave Year Program)〔初年次長期自主活動プログラム〕を開始します。このプログラムは、入学直後の学部学生が、通常の大学生活の開始に先立ち、社会における主体的な活動を長期間体験することを通じて、従来の意識・価値観を相対化しつつ、大学での学びの意義・目的を自ら確認・発見できる途を拓くことを目的にしています。

プログラムの概要

このプログラムは、欧米の大学の入学猶予制度に準じ、学生本人が1年間休学して行う主体的な活動を大学が支援する仕組みです。

長期自主活動の例:

■ ボランティアなどの社会貢献活動
(災害復興支援、学習支援、環境保全、医療・福祉・介護等)

■ 国際交流体験活動
(語学留学、国際NPO活動への参加、長期海外渡航等)

■ インターンシップなどの就業体験活動
(官公庁、自治体、企業、NPO等)

■ 農林水産業・自然体験、地域体験活動
(地域おこし、農山村・漁村など出身家庭・地域と異なる場での生活体験等)

プログラムへの応募資格等

平成25年4月入学者(教養学部前期課程)を対象とします。ただし、留学生については、在留資格等の関係で採用できない場合があります。

入学手続きの時点で希望する活動内容を記載した事前申請書を提出し、入学後、より詳細な活動内容等を記載した本申請書を提出する必要があります。

募集する人数は若干名です。

経済的な支援

このプログラムにより活動を希望する学生は、必要な活動経費の一部支援を本申請の際に申し出ることができます。本プログラムにより長期自主活動を希望する学生本人の意欲や計画内容等を厳正に審査し、適切な金額を決定する予定です。

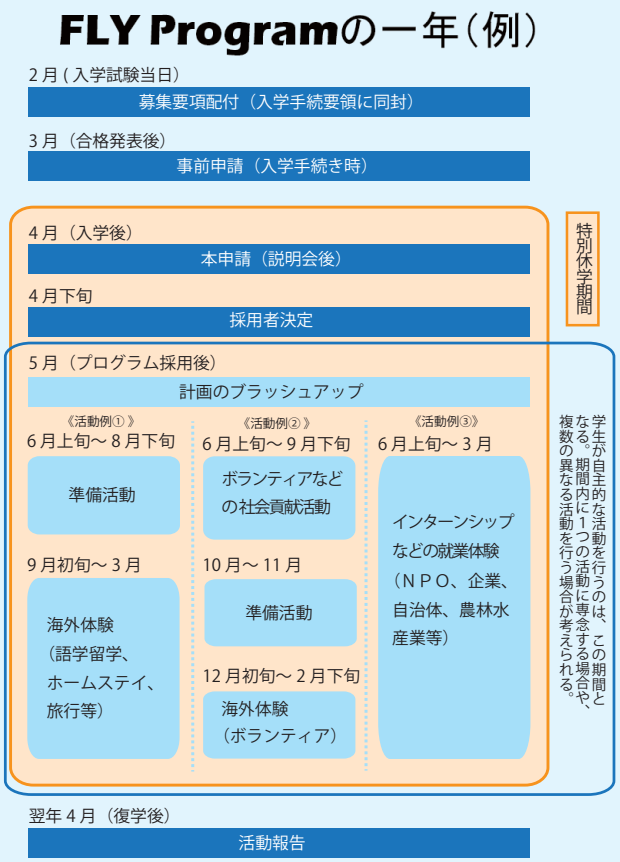
採用された場合の留意事項

■ このプログラムに採用されると、入学直後の1年間は「特別な休学期間」となります(学内関係規則等については整備中)。

■ 1年間の活動内容は、学生本人が主体的に計画・実行するものであり、大学の役割は情報提供などを通じた助言・援助や経済的な支援が中心となります。

■ プログラムに採用された学生は、活動する1年の間、担当教員に対して定期的な連絡を含め、随時相談を行い、助言を求めることができます。

■ プログラム終了後、当該学生には所定の活動報告が求められます。



プログラム問い合わせ: 本部学生支援課
email: fly-program@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
URL: http://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/academics/fly/index.html